宋代募兵制の研究

さいとう　ただかず
齋藤　忠和

宋代募兵制とは、「軍人として飯をくうという形態である」。しかし、こうした理解から一歩踏み出し、それが具体的に如何なることかを知ろうとするとき、これまでの宋代兵制研究では充分に説明できない。

本稿は「募兵制とは何か」という根源的な問いに答えるため、軍法および軍隊を取り巻く人の流れの出口部分について、以下の通り考察した。

第一部は軍法研究である。これまでの研究では、軍法の全容は示されず、律との関係も説明されていなかったが、本研究は宋代軍法の全容を提示し、軍法と常法との関係から、軍隊社会と民衆社会との関わりや差異についても明らかにした。

第二部では、兵士の行く末に関わり、王曽瑜・小岩井弘光両氏の剰員制研究を基礎に、宋代の剰員・帯甲剰員制が王朝の社会安定と予備役的な戦力の確保、また兵士にとってはもしものときの保障となり、募兵制を基底部で支える重要な制度であることを示した。

第三部では、剰員帯甲剰員制を含め、軍隊社会の出口部分における各種保障制度、すなわち「兵士はどこへ行くのか」を包括的に考察し、「募兵制とは何か」について、一定の回答を示すとともに、漏沢園（公共墓地）に注目し、『守城録』という兵書を用いるなど、宋代史研究の新たな可能性を示した。

第四部では、第一部から第三部までの考察を踏まえ、募兵制とは何かについて総括し、北宋禁軍の近代性を確認した。

本稿により、宋代募兵制は、兵士がその生涯を兵士として全うしうる様々な保障制度や軍隊の一元管理を目指すための軍法など、多様な制度からなる複合的なものであることがわかるとともに、中国史上はじめて「兵士（軍人）として飯を食う」ことができるようになった宋代の兵士、とりわけ北宋禁軍はある種近代的な常備軍・国民軍であって、前代までの兵士たちとは明らかに一線を画すことが明示された（兵制の唐宋変革）。したがって宋代の中国は、主に経済的な理由によって戦争が生じ、経済力の乏しい君主たちが臨時雇用の兵士を寄せ集めて戦い、貧者が蓄財の機会としての戦争に群がるような社会状況にはなかったのである。